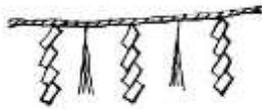




本日はよくお参り下さいました

秋が深まりゆく季節ですが、皆さまいかがお過ごしでしょうか。彼岸明けの27日、長野県と岐阜県にまたがる御嶽山が噴火しました。この噴火により被害に遭われた皆さまに心からお見舞い申し上げます。気象庁の火山課の方が今回の予知は不可能だったと言っていました、自然というものが入智を超えた存在であることを改めて思い知らされた気が致します。御嶽山は富士山と同じく霊峰として古来から崇められ山に入ることは神域に入ることとされてきました。

登山の前には神域を汚さぬよう重潔齋(じゅうけっさい)と呼ばれる100日間にも及ぶ身を清めるための修行を行うことが定められていました。今日では登山はレジャー化していますが、もともとは登拝と呼んでいたように、高山の靈気に触れ、山頂の神社に参拝することが目的だったのです。それにしても今回の災害は不運としか言いようがありません。一日も早く噴火に巻き込まれてしまった方全員がご家族の元に帰ることができますように、また救助にあたる方々含めこれ以上の被害が出ないことを祈るばかりです。道子



秋が深まりゆく季節ですが、皆さまいかがお過ごしでしょうか。彼岸明けの27日、長野県と岐阜県にまたがる御嶽山が噴火しました。この噴火により被害に遭われた皆さまに心からお見舞い申し上げます。気象庁の火山課の方が今回の予知は不可能だったと言っていました、自然というものが入智を超えた存在であることを改めて思い知らされた気が致します。御嶽山は富士山と同じく霊峰として古来から崇められ山に入ることは神域に入ることとされてきました。

10月

1日月首祭 月の初めの恒例祭祀。

13日体育の日 「スポーツに親しみ、健康な心身をつちかう」ための国民の祝日。1964年10月10日の東京オリンピック開会式を記念して、1966年に制定された。2000年からはハッピーマンデー制度の適用で10月の第2月曜日になっている。

15日月次祭 月の半ばの恒例祭祀。

天神様の豆知識 ～十月と日本酒～

10月は和名で「神無月」です。諸国の神々が出雲に集まって留守になるから(出雲では神在月)という説が一般的です。しかし一説には神の月、つまり神を祀る月とあります。伊勢の神宮では17日に神嘗祭が行われ、その年の初穂を献上する祭祀が行われます。また秋の収穫に感謝して村々では秋祭りが行われます。他にも11月の新嘗祭に供えるための新酒を醸す「醸成月(かもなづき)」を語源とする説もあります。10月は新穀が実り、酒造りの始まる月であることから日本酒造組合では10月1日を、日本酒の日としています。



日本神話の世界 全十一回

第7回「八俣大蛇(やまたのおろち)」

須佐之男命は出雲の国の斐伊川(ひいがわ)の川上に天降りしました。その時、上流から箆が流れてきました。命は、上流に人が住んでいると思い、訪ねてゆくと、老夫婦が娘を囲んで泣いていました。名を尋ねると「自分は国つ神、大山津見神(おおやまつみのかみ)の子で、足名椎(あしなづち)、妻は手名椎(てなづち)、娘は櫛名田比売(くしなひめ)と申します。」と答えました。大山津見神は出雲の地の守護神で、「山の神」のことです。泣いている理由を尋ねると、「私にはもともと八人の娘がいましたが、八俣大蛇が毎年来て娘を一人ずつ食べるのです。残るは一人になってしまいました。今年もその時期になりました。その大蛇の姿形は八つの谷と八つの丘にわたり、その腹はいつも血でいっぱい」と言いました。そこで命は櫛名田比売を妻にしたいと仰り、自らの身分を明らかにすると足名椎と手名椎は喜んで承知しました。命は大蛇退治の準備に入ります。まず櫛名田比売を神聖な櫛の姿に変え自分の髪に挿すと足名椎と手名椎に、「強い酒を造り、八つの門のある垣を巡らせて門ごとに八つの台を



に八つの台を

作り、台ごとに器を用意してたぶりと酒を満たすように」と命じました。準備が整い怪物が現れるのを待っていると大蛇が現れ、がぶがぶと酒を飲み干し、酔っ払ってその場で寝込んでしまいました。命は腰に帯びた十拳剣(とつかのつるぎ)を抜き、大蛇に切りかかりました。真っ赤な血がほとばしり、斐伊川は朱に染まりました。須佐之男命が大蛇の尾をきったとき、何か固いものにあたり十拳剣が欠けてしまいました。不思議に思い尾を調べると、それは神々しい剣が出てきました。命は天照大御神に理由をお話になり、この剣を献上しました。この剣が、やがて皇位の印「三種の神器」の一つになります。戦いが終わると、命は出雲で新婚のための宮殿を作るべき場所を探し求めました。そして須賀の地に来て、「ここに来るととてもすがすがしい気持ちになる」と言いつつ宮殿を造りになりました。そして命は歌を詠まれます。

八雲立つ 出雲八重垣 妻籠みに

八重垣作る その八重垣を

「もくもくと雲の湧き上がる出雲で新妻を迎えるために幾重もの垣根に囲まれた新居を造ります。その八重垣よ」そして須佐之男命と櫛名田比売の系譜から六代目に大国主神が誕生します。次回はその大国主神が主人公の「因幡の白兔」のお話です。参考文献『神話のおへそ』神社本庁監修 佛扶桑社発行 / 『現代語古事記』竹田恒泰

著 佛学研ハブリッシング発行